

生き延びるための学びに向けて、今、人類学にできること

——ウイグル族における共生の倫理から——

西 原 明 史

What Anthropology Can Do Now in Terms of Studying Survival Strategies Lessons from the Ethics of Symbiosis in Uighur Culture

Akifumi NISHIHARA

はじめに～ ポケットの中の金貨～

「生きる力を身につけてほしい」。昨年あたりから実施されつつある文部科学省の新学習指導要領の理念だ。同省のホームページにはっきりそう書かれてある。また大臣からの通達文などを読むと、東北での震災がこの方針の切実さをより一層高めたようだ。そうでなくとも直面する課題が限りなく多いこの国で生き延びていくことは、これから益々大変になっていくだろう。「生きる力」を教育のキーワードに掲げた文科省、けだし慧眼である。

ただ、あまりにも遅きに失した感是否めない。大学の教師として日々学生に接する中、私はとっくの昔にこの力の不足を感じていた。具体的に言おう。一部の学生に顕著に見られることだが、資格や就職に直結しない科目へのモチベーションが非常に低い。目に見える利得がなければやる気が起きないというこの姿は、もちろんそれまでの受験勉強で植え付けられたものだろう。偏差値の高い学校に入り、そこで学歴や資格を身につけられれば、収入や評価のいい仕事につくことができる。それはきっと社会的威信につながる。この単純な人生設計が相変わらず幅を利かせている。そして、まさにそれが「生きる力」を弱めていると私は考えているのである。

話がよく飲み込めない方のために説明しよう。ドラマや映画、漫画などでしばしば出てくる次のようなエピソードをご存知だろうか。人から何気なく贈られた金貨や十字架を胸ポケットにしまっておいたら、それが後に敵のナイフだの弾だのの盾になり、おかげで命拾いすることができた。私たちはここに「生きるために必要な力」の中身を見出すことができる。それは「何でもなさそうなものがなぜか気になり、とりあえず大切にできる」ということ。このストーリーが国や時代を問わず散見されることから、これは人類学的な知見と言ってもいいであろう。しかし上述のように、私が勤務する大学には「何でもなさそうな」科目については一顧だにしない学生が少なくない。だから「生きる力」に欠けると述べたのである。

ではそのような学生をどう指導すればいいのか。論点をざっと整理してみた。まず何より「金貨をポケットに入れる気がない」ことが問題だ。つまり、学びに対して「いつかどこで何かの役に立つかも」という長期的な展望を描くことが全くできない。感性や想像力の欠如と言っていいだろう。とすれば、それを涵養することが必要になってくる。次に挙げられるのは、意味がわからない学びに対するアレルギーである。安易な意義や目的（要するに利得）が明示されるまで

乗り気にならないのも学生たちの悪い癖だ。従って、求められるのは「無」意味への耐性を身につけることと言える。以上の2点は一つにまとめられるかもしれない。要するに、学びの意味を自分なりにじっくりと考えることができるようにしてあげなければいけないということだ。もちろん「得するために勉強する」という考えが間違っていることも伝えなければならない。

以上のような課題を遂行するための方法論を考察したのが本研究である。もう一度繰り返すが、すぐには意味が見当たらなくても、とりあえず大事にしておくことが「生きる力」になる。言い換えれば、そうして初めて私たちは「生き延びる」ことができる。では、意味を自ら考え、あわよくばそれを発見する能力や習慣を身につけるためにはどうすればよいのだろうか。

1. 不幸の出来事をめぐるレトリック

ウイグル族の現在

この、「自分で意味を見出す力」を養うために大変いいヒントを与えてくれるのでは、と期待してここに登場してもらうのが、中国少数民族の一つウイグル族である。国内でマイノリティ(少数派)としての立場にある彼らは政治的・経済的に抑圧され、言語や宗教についても自由がない。例えば彼らが集住する新疆ウイグル自治区の地域政府や役所の各部門のリーダーには、原則、漢民族でないと出来ない、と言われている。また、新疆は石油や石炭、鉄など地下資源に恵まれているが、そこに住むウイグル族がアラブ諸国家のようにその恩恵を直接被るわけではない。しかも漢民族が経営する企業への就職は、言葉の壁もあって決して簡単ではない。それを口実にしたかのように2010年頃から開始されたのが、漢語教育の徹底だ。ウイグル語の教科書を使い、ウイグル語で教授されていた民族学校でも、漢民族と同じレベルの漢語ができなければ進学も就職もおぼつかないからという名目で、漢語のみで授業を実施することが強制されるようになった¹⁾。また、ウイグル族はイスラームを信仰しているが、大学生や公務員、共産党員はムスリムの義務である礼拝を禁じられている²⁾。

- 1) 民族学校であるにもかかわらず漢語のみで授業が行われるクラスを「双語班(バイリンガルクラス)」と呼ぶ。理科系の科目は漢語で、文科系の科目は相変わらずウイグル語で教えられているからだ。一方、「維語班(ウイグル語クラス)」と呼ばれる従来通りウイグル語だけで授業を行うクラスも存続しているようだ。また、今年(2012年)の8月に新疆を訪れて話を聞いた際には、「双語班」はうまく機能しておらず、まだ試行錯誤の段階にあるということを教えられた。ウイグル族の教師は漢語でうまく説明できず、学生は学生でよく理解できないため、結局ウイグル語での補足や解説を頻繁に挟まざるを得ないなど授業の効率を著しく低めたという。
- 2) これについては注釈が必要であろう。ムスリムの地域集会所とも言えるモスクへの入場は禁じられており、礼拝も宗教行為であるとして認められていない。しかし自宅まで監視されるはずもなく、家で礼拝を行うことはもちろん可能だが、そこまでしているウイグル族はあまりいないようだ。しかし最近、20代の若者の中にそういう動きが見られる。また、断食明けの祭り(ロザ・エイト: roza eyt)と犠牲祭(クルバン・エイト: khrban eyt)は、イスラームの行事であるにもかかわらず、宗教行為ではなくウイグル族の生活習慣つまり文化の一つと見なされている。従って、この日はウイグル族の男性は皆モスクに入り、礼拝を行うことが許されている。ところが複雑なことに断食は不可である。しかしこれも抜け道はある。断食明けの際には職場も学校も3日間の公休が与えられる(漢民族にはない)。家にいれば誰も見ていないのだから断食は可能で、たった1日でも断食を行う人もいる。因みに彼らは一般的に休みの1日目には墓参りを行い、2日目は親を中心に親戚を訪ねる。3日目は兄弟や親戚への挨拶回りということになり、必ず食事が供されるため断食は不可能になる。なお、1ヶ月間の断食は墓参りの日をもって終了するのがイスラームの規定である。いずれにせよ、全くの自由というわけではないが、ある程度の自由度はあるという見方もできないわけではない。

このような状況にもかかわらず、誇りを失って意気消沈したウイグル族に、私はまだ出会ったことがない。全体的に見れば、様々なハンディキャップを背負い、苦境に置かれているとも言えようが、個々の暮らしぶりから見れば、それなりの生活水準を維持し、生きがいを持って暮らしている人が相当に多い。私がよく訪れる新疆東部の都市哈密（ハミ）でいつもお世話になっている方の息子は、すでに3世代目のiPhoneを使いこなしていたし、デジカメ、ノートパソコン、薄型テレビなどは都市の平均的家庭ではとくに当たり前になっている。普通の公務員が10万円（2012年現在、1元は約13円）を軽く超えるマイカーをキャッシュで購入したりもする。ウイグル族、などと「族」をつけて語るとどこか孤立して後進的な人々を思い浮かべがちだが、実際は21世紀を生きる同時代人でもあるのだ。日本人と比べればかなり厳しい社会環境にありながら、物質的には私たちとそう変わらないレベルを保ち、後で詳しく述べることになるが、精神的な部分ではこちらが学ぶべきところを数多く持つ。つまり彼らは立派に「生き延びている」のである。それを可能にしているのは何か。

結論から言おう。「はじめに」の最後で、「生きる力」を身につけるためには「自分なりに意味をじっくり考える」ことが必要ではないかと提案したが、ウイグル族は確かにそうしているのである。だから生き延びられているわけだ。ではなぜ彼らはこのような姿勢を身につけることができたのだろう。「意味を考える」とは、言い換えれば「認識する」ということだ。そこで少し迂回することにはなるが、まずは認識のメカニズムについて簡単に整理しておきたい。その上でウイグル族独自の認識のありようについて考察していく。

認識の経済学

さて、私たちは自分にとって関わりがありそうな出来事に会ったとき、その原因や背景つまり「意味」を考えずにはいられない。例えば、想いを寄せる人の言葉や仕草、表情を飽きることなく考え続けた体験などがあれば、それを想起してほしい。わけがわからない、だからこそその理由をどうしても知りたいと強く願ったとき、私たちは必死で考え、そこに一つの意味を見出すことになる。もちろんそれは想像の産物であり、いわば単なる「物語」に過ぎない。しかしこのプロセスを経て、初めてその「出来事」は「経験」としてしっかり記憶されることになる。「認識」が完了したわけだ。つまり「物語の生成」こそが認識のプロセスなのである。

私たちの生活世界はこうした「物語」に満ちている。ただ、あらゆる事柄についてその都度「物語」を作成することの苦労は並大抵でない。また様々な困難もありそうだ。だって考えてみよう。たまたま道端で目にした草花について、その外見的特徴（色や形、大きさ）や身体的・心理的効能（においや味、美しさ）を事細かく観察し把握した上で、それとこの世界の別の何か類似したものを発見し、それを使ってその花に名前をつける、というような「認識」がいかに大変なことか。またこの複雑な「経験」をどうやって誰かに伝えればいいのか。いくら何でも不便すぎる。で、私たちは結局、タンポポとかスミレとか彼岸花、とすでに付けられている名前で見目の前の花を理解し、それにまつわる知識や経験からそれらの花を觀賞することになる。そうすれば、その経験を語るにしても「とってもかわいいタンポポを見たよ」の一言で済むのだから³⁾。

3) ここで例として挙げた、ものをそのあるがままの姿に基づいた記号で表象するという認識は実際に行われていた。フーコーによれば、16世紀ルネッサンスの時代までは、記号（つまりものの名前）は、「いつもその指示物と類似し、ほとんど同じようなもの」であった（内田、1990:63）。ある「もの」の「外徴」や「内容」をよく観察し、それと「類似」したものを記号として引用していたのである。➤

解釈やコミュニケーションに関する「経済性」を考慮すれば、必ずこうなる。実際に目で見て手に触れることができるたくさんの物たち、厳密に観察すればどこかに差異をはらんだ物たちを、既製の観点から分類し、特定の意味をはらんだ名前を与えて「そういう物」と強引に見なすことにするわけだ。これが私たちの行う「認識」の実情である。因みに修辞学ではこのような認識を「提喩」と呼ぶ。花も机も星も人も犬も全て、ある種の雑多な物たちを一つに括る提喩によって生まれた言葉である。いや、私たちが使う言葉そのものが、その品詞を問わず全て提喩だと言った方がいいかもしれない。最近の若者がよく使う「やばい」という形容詞を考えればわかる。全く異なる文脈、対象に対して一律に使用されている。要するに、世界は提喩によって意味づけられているのである。

もちろんそれは物に対するときだけではない。人に対しても、出来事についても同様だ。ある国に住む人々や、ある宗教を信じる人々に対するステレオタイプは典型的な提喩である。災難や事故に遭遇した時、神の怒りだの祟りだのといった言葉を持ち出すなら、それもまた提喩と言える。シロアリの塔が崩れること、作っている壺にひびが入ること、妻の機嫌が悪いこと。互いに全く別の出来事であり、何の関連もない。しかし、「どれも妖術師によって引き起こされたのだ」と解釈したとすれば、それは提喩ということになる。

ウイグル族の災因論

ウイグル族にもこういった認識が頻繁に見受けられた。彼らはあらゆる不幸な出来事を「漢族のせいだ」という一言で片付けるのである⁴⁾。就職が決まらないのも、貧困から抜け出せないの

この「類似」にしても、何らかの現実的・具体的な相似性によるだけでなく、それこそ何の根拠もないただの詩的・文学的直感による結びつけによって「似たもの」とされ、それがその「もの」を代理する名前となったりもした。例えば、どちらも刻々とその表情を変えるということで、人の顔が空と結びつけられたという（内田、前掲書：56-57）。星々の中に人や動物などの形を読み取った星座などもこの種の認識方法によるものだろう。物を物で表象する。つまり物がそのまま言葉であったのである。

しかし、このように世界が世界によって認識される、つまり「世界が自分自身に巻き付けられている」（内田、前掲書：55）時代はやがて終わりを告げる。17世紀、古典主義の時代に入ると、言葉は世界から自立するようになった。現実そこに存在するものたちを「類似」性に基づいて別の物で代替させていくのではなく、言葉という人工物で代理させていくことになったのである。なぜそんなことになったのか。世界は無限に広がっている。物の数もあまりにも多い。いちいち丁寧に解釈していくより、できあいの言葉を通して世界を認識していく方が効率がよいし（人が作ったに過ぎない言葉は、物よりはるかに少ないはず）、そうすることで知識の共有も容易になると考えられたためなのかもしれない。

ただ、その結果、私たちは言葉が含意すること以上の内容を物から感知することはできなくなった。世界は一挙にその豊かさを失ったとも言えるのである。

- 4) 今回（2012）の調査は8月中に行ったのだが、ちょうど中国の「抗日戦争」勝利に関するニュースが15日頃には頻繁に放送されていた。そのような番組をウイグル族の友人と一緒に見ていると、「日本が勝てばよかったのに」とか「何でもっと中国を攻撃しなかったのか」などと必ず声をかけられる。また尖閣諸島問題についても彼らとの会話の中でよく話題になり、何の理由も説明されず「あれは日本のものだ」と断言されたこともある。日本が軍事的に対抗する準備をしているかのような報道もなされていたが、「やるなら早く中国と戦争しろよ」と声をかけられたりもした。初対面の人からいきなりそのような主旨のことを話されたこともある。日本人がウイグル族について書いた旅行記などを見ると、ウイグル族は一般的に日本人によくこういう話しかけ方をするようだ。お客さん好きの彼らによる単なる社交辞令ととるか、日本人びいきからなのか、漢民族を心底嫌っているためにそういう言葉が出てくるのか、あるいはそれら全ての気持ちが込められているのか。いずれにせよ私個人はあまりこういう話題には触れたくないし、苦笑いをしながらやんわりと彼らのそういう意見を否定している。

も、ガソリンの値段が高いのも（彼らによると「石油が豊富に産出される新疆の方が北京より高い」という）、麻薬中毒患者が増えているのも（社会問題になっている）、尖閣諸島領有問題で日中両国がもめているのも全て、彼らに言わせると「漢族が悪い」ということになる（いずれも2012年の調査の際に実際にウイグル族から聞いたことばかりである）。あらゆる災厄について、それは「漢族」が原因でもたらされたのだと言い立てる。まさに提喻による説明が、彼ら独自の災因論なのである。こうした認識のメリットはすでに挙げた。効率よく事態を把握できるため、頭を使わなくて済むということだ。また、誰もがそうするので同じ「物語」を共有することもでき、コミュニケーションも図りやすくなるだろう。もちろん、自分たちには何の責任もないことになるのだから、気も随分楽になるはずだ。

でも本当にそれだけでいいのだろうか。マイノリティの彼らがそれで誇りを持って中国で生きていけるのだろうか。あるいは民族自治や独立といった将来の希望へ向けて、少しでも前進することができのだろうか。残念ながらそうではない。論理的に考えればわかる。不幸の「原因」がはっきりすれば、「解決策」も決まり切ってしまう。とすれば、それ以上必死で対策を考えることもなくなる。しかし彼らの言う「原因」が原因だけに、その解決策はあまりに陳腐なものでしかない。それは「漢民族が新疆から出て行く」ことだが、もちろん容易に実現するはずもなく、しかも彼らの思考はとっくにストップしている。これでは現状が永続するのみだ。ウイグル族の立場が好転することなど絶対ない。

彼らのこうした認識のあり方は、冒頭で紹介したこの国の大学生を連想させる。「なぜこういう事になったんだろう」「この政策には一体どんな意味があるんだろう」などと自分なりに懸命に考えることをせず、安易で都合のよい意味にすぐ頼ろうとするとところなど、学生たちにそっくりだ。それなのになぜウイグル族は生き延びられているのだろうか。その答えは簡単だ。変わったのである。「漢民族があらゆる不幸の根源」という提喻に基づいて自分たちの社会や生活を認識することを、彼らはどうやら躊躇し始めている。

私がそれに気づき始めたのはここ数年のことだ。毎年のように新疆を訪れているが、ウイグル族が漢民族に言及するときの内容や語り口に微妙な変化が見られるのである。彼らが共産党やら漢民族やらの悪口を言い始めるとき、以前はそれこそ悲憤慷慨、まるで涙を流さんばかりの口ぶりだったものだ。「私たちだって同じ人間だ。なのになぜこんな目に遭わなければいけないんだ」などと訴えられたこともあった。それが最近はどうだろう。彼らがよく口にする言葉に、「今や我々が共産党の悪口を一言でも言うとすぐに公安局に逮捕される」というものがある。しかしこれはいくら何でも現実離れしているだろう。もし当局が本気でそんな措置をとったら刑務所や拘置所がいくつあっても足りない。しかも、そういうことを道端や飲み屋、食堂など公共の場で私に向かって平気で語るのだから、切実さが少しも感じられない。実際、「本当ですか」と私が問うと、にやっと笑いながら「もちろん本当さ」と返答されたこともある。そもそもこの大げさな物言いは、それを本気で信じているわけではないということを言外におわせるためではないだろうか。

あるいはこんなこともあった。飲み会の場で誰かが「私たちウイグル族は確かに彼らによって抑圧されているが…」などと言いかけると、周囲の者が慌てて彼の口をふさぐようなジェスチャーをしたり、「不不！（だめだめ）」などと言葉で制したりするのである。不思議なのは、それまでウイグル語で会話していた彼らがなぜかこの時だけ突然漢語に切り替えたことだ。それは、このやりとりが私に見せることを意図してなされたものであるということを暗示している

(私はウイグル語会話が不得手なのだから)。そのこれ見よがしさに察するに、これは一種の寸劇なのだろう。手で口を押さえる仕草もどこかわざとらしく、またユーモラスなものであった。切迫感などやはりどこにも見当たらなかったことが印象に残っている。

「漢民族＝諸悪の根源」という図式を誇張して語ったり、それを「台本」にした演技をしてみせたり。この図式はウイグル族にとってもあまりリアリティがないように私には思われる⁵⁾。自分たちに降りかかる様々な不幸の出来事をそれによって説明することに、彼らはもはや信憑性を感じていないようなのだ。要するに、これまで安易に意味を与えてくれたとても便利な認識の源を、いわば小ばかにし始めている。でもなぜそうすることになったのだろうか。それがわかれば、彼らとよく似た「意味の病」(安易な意味にすぐ侵されてしまうのだから)に罹患しているこの国の学生への指導方針も見えてくるはずだ。次章ではこの問題に取り組むことにしたい。

2. 公平と不公平の間で

ウイグル族のジレンマ

ウイグル族独特の災因論が機能しなくなった理由を考えるために、もう一度迂回することを許していただきたい。実は一つどうしても腑に落ちないことがある。彼らはもはや使い古されたこの因果関係をなぜ放棄しないのだろうか。たとえ語り口は変わったとしても、「漢族」を使って不幸を説明する行為そのものは依然継続されている。「漢族が全ての資源を持って行く」「漢族による乱開発で水資源が枯渇した」「漢族の学習法は暗記ばかりで面白くない」「漢族の核実験でウイグル族にガン患者が増えている」「漢族はウイグル族に知的労働の機会を与えない」「漢族はウイグル族を奴隷にするつもりだ」。相変わらず「漢族は、漢族は」と連呼しているのである。私は新疆滞在中、いつも耳にたこができるほどこの類の話を聞かされている。とにかく彼らが何名か集まれば、飲み会であれ、お茶の時間であれ、親族が集まる団らんの時でさえも必ずそういう話が出るのである。

これは恐らくウイグル族としての矜持を保つためなのだろうと思う。既に触れたように、彼らは間違いなく不公平な立場に置かれている。就職や昇進はもちろん、ウイグル族が憧れる留学でも、スポーツの世界でも(代表チームには決して入れないという形で)、差別が存在するようだ⁶⁾。た

5) ある若いウイグル族からこんな話を聞いたこともある。1944年に新疆で成立したウイグル族の独立政府の軍隊は、共産党の軍隊によって騙されて窪地におびき出され、周囲から一斉射撃を受けて全滅させられたのだという。しかしこの話には実は元ネタがある。中国で毎日のように放送されている「抗日戦争ドラマ」の中で、日本軍が中国の軍隊に対して行う常套手段なのだ。ウイグル族はそういうドラマを「作り話だ」と評してばかりにしている。そんなドラマのワンシーンを引用して漢民族の軍隊を表象するわけだから、自分自身の語りそのものもまた「作り話」であることを暴露しているようなものである。

また2009年7月にウルムチで起きたウイグル族の大暴動についても、この若者は「漢民族の警察は逃げ腰になりながら、ビュービューとピストルを撃ち、ウイグル族はナイフを手にウーっと叫びながら彼らを追いかけていた」などと語りながら、その場にいた人々の物まねを面白おかしく行っていた。ウイグル族の誰にとってもまだ生々しい記憶であるはずのこの悲惨な事件の中に出てくる漢民族でさえ、笑い話のキャラクターにされてしまっているのである。

6) ただし進学に関して言えば、少数民族、特にウイグル族は優遇されている。高校進学については、新疆には「内地高中班(内地高校進学クラス)」という特殊な制度がある。経済的な困難を抱えた家庭の子弟を、一定の条件をクリアすれば新疆以外の地域の高校へ進学させるもので、学費、生活費、交

だ、だからといってそれを当たり前のことにしたり、仕方ないと諦めてしまったらどうだろう。新疆東部哈密地区に住むウイグル族からこんな話を聞いたことがある。「我々は教育水準も高く、法律についても詳しい。もし無理難題を押しつけられたらきちんと法律に従って反論するので、面倒になることを恐れて政府も我々をいじめない。ところが南新疆のウイグル族はそうではないため、当局によって完全に抑圧されている。」そういうことだ。その内容や言い表し方に制約はあるとしても、漢族を批判することを忘れたら自分たちの立場は益々悪くなる、と彼らは考えているのである。実際、少々下世話な表現だが「なめられてたまるか」という気分を彼らから感じることが多い。つまり、人としては対等であることを信じ、公平に扱われることを願う気持ちはしぶとく捨てないようにする。そんな彼らの気分が、「漢族が…」という語りを生み出させ続けるのである。

しかし現実の治安体制から見れば、ウイグル族が何らかの具体的な抗議行動に出ることはこれまで以上に困難になっている⁷⁾。また中国の軍事力や経済力、国際社会上の地位の劇的な上昇、それに伴う社会的なインフラの高度な発展によって新疆各都市の相貌も大きく変化した。そんな場所に「民族独立」などという歴史の教科書に出てくるような言葉はどうにも似つかわしくない。彼らだってそれはわかっているだろう。現に私がその言葉を耳にすることは全く無くなったのだから。つまり民族間の不公平を力づくでも是正していく可能性はもはや限りなくゼロに近い。

つまりウイグル族はジレンマを抱えているというわけだ。公平を望みつつもそれが不可能であることを認めざるを得ないという意味で。でも、ここにこそ彼らがそれなりに「生き延びていく」ためのチャンスが秘められている。こう考えてみてはどうだろう。公平だけを強く期待するのは、それが極度に困難であることを考えれば単なる理想主義にすぎない。一方、先ほど例に挙げた南新疆のウイグル族のように、不公平を文句も言わず受け入れるだけでは無気力のそしりを免れない。しかし、「公平を願いながらも不公平を受け入れる」という両者の折衷的な態度は、それぞれのマイナス点を克服したものとなり得る。ある程度は現実的になり、もう少し積極的になれるという具合に。すると必然的に「民族」のようないわゆる「想像の共同体」よりも、家族や親族、友人やご近所といった目に見える世界へ意識を向けることになるだろう。つまり、身の回りという具体的な環境で、今、自分に何ができるのかを考えるようになるのではあるまいか。

通費など全て国家が負担するという。毎年千人を数える中学生がこの制度を利用しており、大多数はそのまま内地の大学に進学する。

また経済水準の低い新疆南部から、大勢の中学生を新疆東部の哈密などにある師範学院にこれもまた全ての費用を国家が負担して進学させている。哈密は学校の設備も整い、教育レベルも高い。また漢民族が多い地域なので漢語のマスターにも有利ということでこの地が選ばれているという。

さらに留学については、漢民族に聞くと「ウイグル族の方が優先的にチャンスをもらっている」という答が返ってくる。国費で日本に留学するウイグル族は多いし、ウイグル族を招聘しようとする大学関係者も多かったように思う。因みに私が学んだ九州大学に来ている新疆出身の留学生はほぼ全員ウイグル族であった。

7) 2009年の大暴動以降、公安局や武装警察による警備は相当に厳しくなっているようだ。ウルムチのウイグル族が比較的多く住む地区では、パトロールカーが夜間、頻繁に巡回している光景を見かける。また比較的治安の良い哈密市でも夜になると「交通警察」のバトカーが要所に止まっている。一見交通違反の取り締まりのためと思われるが、現地のウイグル族に言わせると本当の目的はウイグル族への「威圧と監視」なのだという。

ウイグル族の親密圏

これは私の単なる推論ではない。ウイグル族への取材を通して、実際にそうなっていることを実感した上で、帰納的にこの仮説を提出してみたのである。彼らにとって家族・親族の絆は何よりも大事なものだ。特に子どもに対する愛情の深さは特筆すべきであろう。ウイグル族は大抵異口同音にこんなことを語る。「ウイグル族にとって親になるということは本当に大変だ。子どもが小さいときには一生懸命育て、大きくなれば高い学費を負担し、就職の面倒を見てあげ、結婚するとなればあらゆる準備を整えてやり、老後は子どものために孫の面倒も見ろ。」これが口だけではないことを私は十分に見聞してきた。中国の公務員試験は省を単位にして行われるが、就職難でもあり、非常に競争率が高い。一次の筆記試験はともかく、二次の面接の段階ともなると、地方都市に住む親が仕事を休んでまで首府のウルムチに出てきて、ツテを頼りに合格のための運動をする、という話を聞いたことがある。まだ結婚相手も何も決まっていなのに、大学を卒業したばかりの息子に早々とマンションを買ってあげる話もよく聞く。因みに結婚式の費用も親が負担するし、新居の家具や電気製品は新婦の親がもつ⁸⁾。

もちろんキョウダイや親族間の関係も非常に親密だ。ウイグル族は子どもに随分甘いわけだが、結婚相手に関しては制約を課す。基本的に同じ地域出身の者同士で結婚することが求められるし、はっきりとそう言い渡すケースもある。結婚式や葬式、断食明けの祭りと犠牲祭の2大祭などの行事において、親兄弟や親戚が互いに訪問し合い交歓することを彼らは何より大切にしているわけだが、違う地域の者同士で結婚するとそれが難しくなるからだ。また私のある知り合いは、遠方に住む親やキョウダイを週末や休みごとに訪ねるだけのために、わざわざマイカーを購入している。それほど親戚付き合いを重視しているのである⁹⁾。

8) 私の知り合いで、今年(2012年)24才になるウイグル族の青年は以前タクシー運転手をしていたのだが、車は父が買ってあげたそうだ。そこまで親が面倒を見てあげるのである。因みにこの車の価格は8万円、日本円にして100万円を超える。この父は普通の公務員に過ぎないのだが、親戚などからお金を工面したという。またこの親子についてはこんなシーンに出くわしたときもある。この若者が学歴を身につけるため通信制の大学に入学することになったのだが、その申請手続きに同行したところ、父親が仕事を休んでまでついてきていた。息子に代わって受付の人にあれこれと訊ねるなど、まるで小学生くらいの子どものように世話を焼きっぱなしであった。

しかし、ただ溺愛するだけではないことは付記しておきたい。ムスリムであるウイグル族には「イスラームを子どもに伝えるのは親の責任」という言葉があり、折に触れてその教えを子どもに語る。例えば手を洗った後、その手を振って水しぶきを散らしてはいけないとか、食事の際に、お茶碗を箸でたたいて拍子を取るようなことをしてはいけないとか。挙げればきりがながい、とにかくそういうイスラーム流のマナーが親から子へと伝えられていく。子どもたちは幼少の頃から、地域や家庭で行われるイスラーム関係の儀礼を通して、自分がムスリムであるというアイデンティティを獲得していくのだが、そのムスリムの先輩としての知識や経験を豊富に持つ親を、一人の人間としてだけでなくムスリムとしても尊敬するようになるのである。だからだろうか、ウイグル族の子どもは日本人や漢民族の子どもと違って、親にいわゆるタメ口を聞いたり、ぞんざいな口の利き方をしたりするようなことは決してない。また親の前で喫煙や飲酒をすることも一切ない。だから父親がお客さんと酒を飲み始めると、それまで一緒にいたとしてもさっと席を外す。そういう立ち居振る舞いを見ていると、甘やかされている割には子どもが親に対してきちんと節度を保ち、また敬意を抱いていることが感じられ、私はいつもウイグル族の親子関係を好ましいものに感じている。

9) この夏にも新疆を取材したが、ちょうど「封齋節」(断食)の時期で、それが開ける日(開齋節:ロザ・エイト)前後の様々な行事にも立ち会うことができた。日本でいう大晦日に当たるのがロザ・エイトの前の日で、この日には親族がうちそろって墓参りに出かける。夫も妻もそれぞれ自分の父母の墓に出かけるようだ。聖職者のイマームに頼んでコーランを詠んでもらったりもする。断食明けの当

さらに地縁的なつながりが相当に強いのもウイグル族の特徴である。上記の2大祭の時には、ピティラ（pitira）と呼ばれる寄付が必ず行われる。親戚や友人はもちろん、地域（村や郷）の中で経済的に困窮していたり、病気で入院や手術が必要になった人がいれば、そこに住む人やその家族が少しずつお金を出し合うのである。年配者が直接届けることもあるし、各地域に必ず一つ設置されたモスクのイマームに託されることもある。地域の誰がどんな問題を抱えているのかについての情報は、1日5回行われるモスクでの礼拝の際などにみんなに伝わるという。このように、「みんなで支える」というやり方は家族内でももちろん同様で、仕事を失ったキョウダイがいれば、家族全員で生活の面倒を見る。以上のように、ウイグル族においては家族・親族・地域がいわゆるセーフティネットの役割を果たしているのである。

さらに付け加えておくと、ウイグル族が投資や商売など何らかのビジネスをする時、パートナーは大抵家族が親戚であるようだ。友人と組んだ話は聞いたことがない。農地や不動産を取得し、それを活用するというサイドビジネスを行う公務員もいるが、資金は身内から集めているし、果樹の栽培なども親戚や親に委託したりしている。それほどに互いに信頼しあっているということだろう。

因みにウイグル族はたとえ面識のない人でも、その人の葬式があることに気づけば参列するという習慣がある。ましてや自分の生まれ故郷出身の人が亡くなった場合はなおさらだ。農村の場合は集落の外れに墓地があり、村人のほとんどはそこに埋葬されるのだが、地域の男性ほぼ全員がこの葬列に加わることになる。トゥットと呼ばれる台に遺体を載せて運ぶ際には、参列者が争ってこれを担ぐ（親族は担がない）。また埋葬した後で土をかけるのだが、それもみんなが進んで行く。イスラームでは葬式に参列することは信者の義務であり、それをすれば神から褒めてもらえると考えられているが、それを求めてこのように積極的に参列するのかと聞いてみると、「誰もそんな報いのことなど考えていない。人としての義務というか当たり前の倫理感からそうしているだけだ」、という答えが返ってきた。

ウイグル族の倫理

ざっといくつかの例を挙げてきたが、ウイグル族が家族・親族を中心にさらに地域社会まで含めて、お互いに助け合っていることがよくわかる。あるウイグル族が、先述のピティラを行う際に側にいた私にこんなことを話してくれた。「私たちは決して豊かではない。でもこうしてみんなで支え合って暮らしている。そうすることで誰もが喜びを感じることができる。贈るのは嬉しいし、受け取った人ももちろん嬉しいのだから。」見返りのためではなく、誰かのために何かをしてあげることそのものから喜びを得ているというわけだ。「公平を願いながらも不公平を受け

日の早朝には家族や親族でロザ・エイトの日だけ開かれるモスクを訪れ、礼拝を行う。その後は実家の父母を訪ねる。前の日に夫方の実家を訊ねた場合は、この日は妻方の実家を訪問する。その次の日はキョウダイの自宅を訪問し、食事を摂ったり歓談したりする。1949年の中華人民共和国成立いわゆる「解放」後の1950～60年代に生まれ、今のウイグル族社会の中心になっている世代はキョウダイの数が多いため、この親戚訪問が大変だ。家に入り、オンドルの上に座り、イマームや年長者がコーランを唱える。その後、テーブルに並べられた果物やお菓子、ナン、サンズ（小麦を練って麺状にし、それを束にして巻き付けるように重ね、さらに油で揚げたお菓子。この日のシンボルのような存在）などをちょっとだけつまみ、すぐに次の家に向かうという慌ただしいものになったりもする。いずれにせよ、この儀式を彼らが欠かすことは絶対ないし、また楽しみにしている。親戚付き合いが深いといってもお互い仕事が忙しいため、例えば妻のキョウダイということになれば、1年のうちそう何回も会えないからだ。

入れる」という彼らの態度は、論理的に考えれば「現実的で積極的な」行動を生むことになる。とすれば、実際に手が届く範囲内で何ができるかを考える方向へ進むのではないかと想像してみたわけだが、確かに家族や親族そして地域において、「無償の贈与」を行っていたのである¹⁰⁾。

ただ、このような行為は伝統的なものであり、ウイグル族が不公平を受け容れ始めたここ最近に始まるものではなかろうという反論はあり得る。しかし、そもそも結婚が派手になったのも、学費の高騰も、高価なマンションや車を買えるようになったのも、そして貧富の差が中国に発生したのも、サイドビジネスが活発になったのも全て「ここ最近」のことなのだ。彼らはこういった事柄に関連した「無償の贈与」を行っている。とすれば、家族・親族・地域という小さく具体的な空間においてささやかな幸福を作り出すことへの格別の熱心さは、民族独立問題という大きく抽象的なテーマからの近年の「撤退」と軌を一にするとと言っても過言ではないのではないだろうか。自分の周囲で何かできることはないかと考えた時に、元々葬式などで示されてきたような「当たり前の倫理観」が発動し、「無償の贈与」を行い始めたのであろう。

「漢族があらゆる不幸の原因」。この語りを折に触れて繰り返しつつも、ウイグル族はその内容には信憑性を感じていなかった。一体なぜそうなったのか考えるのが本章の目的だったわけだが、どうやらやっとその答えにたどり着いたようだ。家族・親族・地域といった「小さく具体的な空間」で、そこの成員が気分良く過ごすために彼らは力を尽くしている。自分だけのためなら、失敗しても誰も困らない。ちょっとうまくいかなければ「漢族が悪い」などという言い訳で投げ出しても、誰からも文句は言われない。また他責的な発想は自分を慰めるためにも都合が良い。しかし顔の見える身近な人の期待に応えるためならやる気も違ってこよう。何としてでも成し遂げなくてはならないということになれば、うまくいかなかったときも安易な説明などに頼らず、失敗の背景や原因を厳密に考察するようになるはずだ。つまり、「小さな世界」でささやかな幸せを生み出したいというウイグル族の切実な想いこそが、安易な物語に侵される「意味の病」から彼らを立ち直らせたのである。

3. 生き延びるための村上春樹

「はじめに」で述べたように、目の前の学びに一体どんな意味があるのか全く感じとれないし、

-
- 10) これは、評論家の内田樹がフェミニズム批判を行う際に用いた言葉だ（内田，2008）。簡単にまとめると以下のような内容になろう。フェミニストによる男女平等の主張は決して間違っていないが、例えば母や妻、娘の立場にある者が、父や夫、息子と全く同様に外で働くことのみを至上の価値観としたとき、家庭内弱者（子ども、病人、老人、障害者など）は誰がケアをするのかという問題が生じる。保育園や病院、介護施設といったビジネスによるケアでいいではないかという意見もあるが、それがお金と引き替えの商売である以上、上述の弱い立場にある人たちは「私は家族から受け入れられている。だからここにいていいんだ」という承認感や自尊心を得ることはできないかもしれない。彼らに「柔和さ、ぬくもり、癒し、受け容れ、寛容、慈愛、ふれあい」といったものを提供する人がやはり必要であり、それはビジネスと正反対のもの、つまり「無償の贈与」でなければならない。ではそれを誰が担うのかというと、生物学的な性には関係なく、「他者に先んじて引き受ける」ことのできる人がそうすべきであると内田は提案している（内田，前掲書：226）。「他者に先んじて」とか、「無償」という言葉からわかるように、不公平を引き受けられる人間だけが家族に救いをもたらすことができるのである。「公平を望みつつも不公平を受け容れる」ことができたウイグル族が家族や親族への貢献へ向かうのではないかという私の仮説は、内田のこの主張に触発されたからであることをここに付記しておきたい。

また想像しようとしめない。利得につながるという安易な意義が明快に示されないと学ぶ気にならない。この国の少なからぬ大学生がそういう学びに陥っている。それは、「気になるものは大切にしまっておく」ことが生き延びることにつながるという人類の叡智に照らすと致命的な欠点になるはずだ。では一体どうすれば、彼らに「生き延びる力」を身につけさせることができるのか。それを考えることが本稿のテーマであった。そのために、私が長年調査研究してきたウイグル族の生き方を題材として使ってみようと思い立ったわけだが、ここまでの考察によって、指導のための方法がおぼろげながら見えてきたような気がする。

ウイグル族も、自分たちの不幸の原因についてじっくり推理することを怠ってきた。責任を漢族に転嫁する安易な物語でそれを理解し続けてきたのである。しかし彼らは、「公平を望みつつも不公平を受け容れる」ことによって、その物語からリアリティを喪失させることに成功した。前章で説明したとおりだ。ということは、私の学生に対しても「公平を望みつつも不公平を受け容れる」、つまり「不公平の甘受」という生き方を勧めればよいということになる。もちろん彼らは少数民族ではないわけで、いきなりそんなことを言われても戸惑うばかりだろう。それが一体どういう生き方なのか、具体的なイメージを描けるモデルのようなものを示す必要がある。

実はとてもわかりやすいモデルが小説家の村上春樹によって提示されている。「雪かき仕事」である。村上春樹を論じる中で内田樹がそう指摘している。引用してみよう。「『文化的雪かき』という言葉が『ダンス・ダンス・ダンス』で出てきますが、ああいうことを主人公の責務として描いた作家なんてこれまでにないんじゃないですか。一人一人の雪かき仕事のような無名の、ささやかな献身の総和として、世界は辛うじて成り立っている。そういう労働哲学、僕はとても好きです」(内田, 2010: 224)。雪国では雪かきをしないと大きな被害もたらされる。しかしお年寄りなど何らかの理由でそれができない人もいるはずだ。そういう時にその人のためにさっと雪かきをしてあげられるような、そんな生き方をしている人がこの世の中を支えている、と内田は語っているのである。彼はまたそういう人のことを「センチネル(歩哨)」と呼び、その仕事の意義に脚光を当てている。「彼らのささやかな努力のおかげで、いくつかの破綻が致命的なことになる前につくろわれ、世界はいつきの均衡を回復する」(内田, 前掲書: 245)。誰も知らないところで誰も知らないうちに誰かにとって役立つ仕事を黙々と行っている人がいる。村上春樹はそういう人を主人公に小説を書き¹¹⁾、それに触発された内田は、「無償の贈与」の大切さを提唱した。

11) 村上春樹による短編集『神の子どもたちはみな踊る』の中に、「かえるくん、東京を救う」という作品がある。東京の地下に眠る大みみずが大地震を引き起こすのを「かえるくん」が未然に防ごうとする物語である。このかえるくんが助力を仰ぐのが「片桐さん」だ。信用金庫に勤める彼は、返済金の取り立てという「人がやりたがらない地味で危険な仕事を引き受け、黙々とこなしてきた」(村上, 2002: 163)。その間、亡くなった両親の代わりに弟と妹を男手一つで育て上げ、ちゃんと大学にもやり、結婚もさせた。そのため自分の時間も収入も犠牲にし、結婚の機会も逃した。しかし彼らは片桐さんに感謝するどころか軽んじさえる。会社の上司も彼を正当に評価せず、うだつが上がらないままだが、片桐さんは愚痴ひとつこぼすでもなく、相変わらず自分の仕事に精出している。そんな片桐さんだからこそ、地下の大みみずと闘うという、たとえ勝ったとしても誰も気づかず褒めてもくれない仕事が出来たというわけだ。典型的な「センチネル」である。村上はこんな彼を終始優しい筆致で描いているように私は感じた。例えば、「あなたのような人にしか東京は救えないのです。そしてあなたのような人のためにぼくは東京を救おうとしているのです」(村上, 前掲書: 171)と、かえるくんが片桐さんに語る箇所には、村上の「センチネル」的存在に対する敬慕の気持ちがよく表わされている。

例えば学校においてなら、自分が良い点を取るより、友だちが良い点を取るためにその子がわからない所を教えてあげることを優先する子ども。職場なら、自分一人が業績を上げることを行おうのではなく、その人がいると一緒に仕事をしている人が元気になり、輝きを増すことになるような社会人（内田，2009：211-212）。家庭なら、とくに達成感があるわけでもなく、賃金も支払われないし、社会的敬意も得られない「家事仕事」をきちんとこなす人（内田，2010：239）。どれもそれぞれの場所の「センチネル」であり、そんな彼らによる「無償の贈与」だ。こうして初めて、学校も職場も家庭も、その成員がそれなりに快適に過ごせる場になる。

これくらいで説明はもう十分だろう。「不公平を甘受する」生き方とは、少し難しく言えば、誰かがやらなければならないのに誰もやりたがらないことを、「それなら私が」と言ってさっと引き受けられるような人になることであり、かいつまんで言えば、「身近な誰かのために何をしてあげられるのか」をいつも考えながら生活するということなのだ。それは、ウイグル族たちが家族や親族、地域の中で支え合いながら暮らしていくこととほとんど変わらない¹²⁾。「不公平の甘受」という生き方を日本という文脈に移してみても、結局は「誰かのために」を旨として生きることになるのである。こう理解すれば、別に少数民族にならなくても、ウイグル族のような生き方をこの国で実践することができる。すると彼らがそうだったように、この国の私の学生たちももしかしたら安易な意味にとらわれずにすむかもしれない。本当にそうなるのか、そこに到達するまでのプロセスをたどって確認してみよう。

まず何より、普段の暮らしの中で利得を求めなくなるにより、学びに対しても同様な見方をするようになるはずだ。「得するために勉強する」という一種の消費者マインドから脱皮できるのである。そうなれば、たとえすぐには意味や意義が明確にならなくても、その科目を受講することに抵抗はなくなる。今や「無」意味に耐えられるようになったのだから。また、「誰かのために自分に何ができるのか」をいつも考えていれば、あるいは周りからの求めに懸命に対応していくうちに、自分にいくつもの「用途」があることがわかってくる。自分という存在が、思わぬ時に思わぬ形で意外な人のために力になれることも必ず実感できるはずだ。そうなれば、逆に他者もまた私にとって意外な意味を持つのでは、と想像することが可能になるのではないだろうか。私たちは自分の姿を他人に投影したがるものだから¹³⁾。そんな感性が養われれば、人だけでなく、ものや出来事といったその人が出会うもの全てについて、「いつかどこかで何かの役に立つのでは」と想像したり、自分なりにその意味を考えたりすることはそう難しいことではな

12) 誰かのために自分に何ができるか、何を贈ることができるか、それを的確に考えられるのは、やはり相手が身近な人の時であろう。いつも接していることで、その人が何を望んでいるのか正確に感受することができるのだから。ゆえに自ずと小さな集団の中で自分にできることを模索するようになる。本文でも挙げたように、学校や職場、家庭あるいは地域というような小集団の中でこそ「無償の贈与」が行われやすくなる。その意味でも、「公平を願いながらも不公平を受け容れる」という生き方は、国を超えて同じような活動を私たちにさせることになるようだ。

13) 内田（2012a）によれば、「『村度する人』は相手の欲望を読み取っていると思っているとうのその時に自分の欲望を語ってしまうものである」と述べている。他国の外交政策を語るとき、「アメリカ（あるいは中国、韓国、北朝鮮）はこんなことをしそうだ、だから気をつけなければ国益が失われる」などとコメンテーターが力説するシーンをニュースなどでよく見かけるが、彼はその時、もし自分がその国と同じ立場にあれば「ぜひそうしてみたい」と思っていることをそのまま語っているに過ぎないと内田はいう。実際、この国は戦前、それらの国に「そういうこと」を行っていたのだから。私たちはえてして自分の「歪んだ自画像」を他者に押しつけているのかもしれない。

い。確かに「何でもなさそうなものが気になり、とりあえず大切にできる」ようになるのである。

「誰かのために」ということを何度も何度も学生に訴えることで、彼らの今の学びのあり方をほんのわずかでも転換することができる。今回の考察を通して、そんな希望を持てるようになった。就職や資格に直結するから、つまり何らかの利得があるなら学ぶけど、なければ勉強しない。そんな今時の大学生に対して、今回の論考で手に入れた方針というか理念のようなものが効力を持つかどうか、実際に自分の教育活動の中で試してみるつもりである。

おわりに～共に生きるための壁～

あらゆる不幸の出来事を「漢族のせいだ」という言葉で説明していたウイグル族は、「不公平を甘受」し、「誰かのために」生きようとすることで、安易な意味づけに頼らず、自分なりに物事をしっかり考えることができるようになった。何か利得がなければ学ぶ意欲が湧かないこの国の学生も、同様な意識を持つことによって世界に対する感度や想像力が高まると推論できる。前者の場合はそれがあまりにも無効すぎて使えないという理由で、後者については自分の「使い道」を常に更新していくことを通して、決まり切った意味づけから解放され、物事全般の意味を深く考える習慣ができあがっていくのである。これが本稿の結論だ。

改めて振り返ると、ウイグル族とこの国の学生では、自分の知性を使って意味を考えるようになるまでの経緯には多少の違いがあることがわかる。しかし彼らに意味を考えさせるのが、家族や親族、職場や学校そして地域社会といった、彼らにとって身近な人々であるという点では共通している。それも当然であろう。誰かのために何かを行おうとしても、お互いの「顔」が見えなければ何も始まらない。ある能力、知識、経済力、人柄を持った人が目の前に現れて、初めて「この人に頼んでみようか」という希望や欲望が生まれ、また、「この人が頼むのなら」と思って、その期待に応えようとする意欲も高まるのだから¹⁴⁾。

「無償の贈与」を社会関係のベースにするよう提案している内田は、「自分より弱い立場の人たちを含む相互扶助的なネットワーク」こそが「贈与」の成り立つ要件だと語っている（内田、2011:176）。ウイグル族はまさにそんな小集団の中でお互いに支え合い、わりと幸せな生活を営んでいた。結局、そんな「顔の見える共同体」（内田、2012b）の中でしか幸福は生み出せないであろう。「ウイグル族」という抽象的な「想像の共同体」よりも、身近な社会集団で生きることを彼らが選択したのうなずける¹⁵⁾。

ウイグル族のこうした生き方は、異民族の共生という大変困難な問題に対する彼らなりの解答

14) これも内田のブログからの引用だが（2012b）、彼は、「欲望というのは自存するものではなく、『それを満たすものが目の前に出現したとき』に発動するものなのである」と述べる。確かに、私たちは唐突に「あるものを手に入れたい」と望むわけではない。ある情報が与えられ、それに刺激されて初めて「それ欲しいなあ」と思い始めるはずだ。小さな集団なら、こういう時、「贈与」が迅速に実現する。なぜなら当事者同士で直接やりとりすることができるためである。

15) 「ウイグル族」という民族呼称が使用され始めたのは1921年である。その年、ソ連で開催された東トルキスタン代表者会議において、新疆地域出身の参加者たちが、イスラームやトルコ系の言語、生活様式の多くの部分を共有する自分たちを一括りにする名称として、8世紀頃中央アジアに存在していた王国の名前から流用してきたものだ（熊谷、2011:38-39）。典型的な提喻による認識である。日本の5倍と言われる広大な新疆の周縁部に散らばるオアシスに定住してきた彼らは、カシュガル人、ホータン人など元々そのオアシス名で自らを名乗っており、それが彼らのアイデンティティであった。

だと私は考えている。混ざり合って（あるいは張り合って）一緒に暮らすのではなく、それぞれの民族がそれぞれの「顔の見える共同体」の「壁」の内側で幸福を追求する。一種の棲み分けのような形で。それで良いのではないだろうか。同じムスリムである回族の友人がこんなことを言っていた。「漢民族はムスリムの習慣をちっとも理解しようとしな。だからお互い不愉快になることが多く、それが民族関係悪化の原因にもなる。もう少し彼らがイスラームについて勉強してくればいいのだが。」しかし漢民族がその期待に応える可能性は恐らく低い。圧倒的なドミナント（多数派）としての誇りもあるわけだから、「気を遣うのはムスリムの方」と考える人の方がはるかに多いはずだ。ウイグル族はそれを見越して、「ウイグル族」の一員としてのアイデンティティよりも、「顔の見える共同体」メンバーとしてのアイデンティティを優先し始めたのかもしれない。

「ウイグル族」であることを強調しなければ、漢族との摩擦は確かに避けられる。「民族」から「身内」へといわば「引きこもる」ことで、彼らは新疆の安定を実現していると言えなくもない。もしかしたらウイグル族の誰もそんなことはやりたくないのかもしれないが、でもやらなければならないと考えたのであろうか。きっと漢民族は彼らのそんな葛藤に気づいてさえないと思うのだが。そう、ウイグル族は彼らの「小さな共同体」にとってのみならず、中国という巨大な国家にとっても「センチネル」の役割を果たしていたのである。最後にこのことに気づき、改めて彼らに敬意を表したくなった。

参 考 文 献

- 内田隆三, 1990, 『ミシェル・フーコー』, 講談社。
 内田 樹, 2008, 『こんな日本でよかったね—構造主義的日本論』, バシリコ。
 内田 樹, 2009, 『街場の教育論』, ミシマ社。
 内田 樹, 2010, 『もういちど村上春樹にご用心』, アルテスパブリッシング。
 内田 樹, 2011, 『呪いの時代』, 新潮社。
 内田 樹, 2012a, 「『付度』する人たち」, 『内田樹の研究室』(5月9日の「ブログ」)
 URL: <http://blog.tatsuru.com/2012/05/>
 内田 樹, 2012b, 「市場からの撤収」, 『内田樹の研究室』(8月11日の「ブログ」)
 URL: http://blog.tatsuru.com/2012/08/11_1040.php
 熊谷瑞恵, 2011, 『食と住空間にみるウイグル族の文化—中国新疆に息づく暮らしの場』, 昭和堂。
 瀬戸賢一, 1986, 『レトリックの宇宙』, 海鳴社。
 村上春樹, 2011, 「かえるくん、東京を救う」, 『神の子どもたちはみな踊る』所収, 149-186 頁, 新潮社。

【付記】

本稿の基礎となる資料の多くは、平成 23、24 年度文科省科学研究費補助金基盤研究 (B) (研究課題名: 「現代中国におけるウイグル族の民族意識とイスラーム信仰に関する民族誌的研究」, 研究代表者: 西原明史) による現地調査の実施によって収集されたものである。また調査にあたっては、新疆ウイグル自治区哈密地区文化局非物質文化遺産保護センターのサマツ・アスラ主任を始め、多くの方々にお世話になった。いちいちお名前を列挙することは差し控えるが、この場を借りて深く感謝申し上げたい。

[2012. 9. 27 受理]

とも言われている。従って、ムスリムとしての同胞意識は当然あったとしても、遠く離れたオアシスに住む新疆の住民を「身内」と見なしていたとは考えにくい。現在でも哈密のウイグル族は南新疆のウイグル族をひどく軽蔑しており、「ウイグル族」がまさに「想像」によって「創られた」民族であることを窺わせている。